



【濃尾大地震編】

震災研究の土台つくる

この写真、ご記憶の読者は多いだろう。長く中学高校の理科教科書に載った、世界的に有名な濃尾地震の断層写真である。

現在は国指定特別天然記念物となり、根尾谷地震断層観察館が「大災害の記憶の風化を食い止め、災害に対する心構えを子子孫孫に伝える拠点」と位置付ける場所だ。3・11の東日本大震災を経験したわれわれにとっても、決して他人事ではない。

「人類の目の前で、一瞬にしてこのような断層が生じたことが写真や記録で詳しく報告されたことは、世界的に見ても初めて」とされる約120年前



濃尾地震でできた根尾谷大断層の写真。当時、現地調査に入った田中館愛橋がこの断層を発見した（二戸歴史民俗資料館提供）

の地震。今まで日本の内陸部で起こった最大の直下型地震だ。この濃尾地震と断層写真、どれも田中館愛橋と密接に関わる。田中館はこの地震をきっかけに、世界で初めてとなる本格的な地震研究および震災予防研究の体制をつくり上げたのだ。

1891（明治24）年10月28日午前6時37分、岐阜県根尾谷（現・本巣市根尾谷）を震央とする大地震が発生した。マグニチュード8.0。仙台から鹿児島まで揺れた。

当時、東大物理学教授だった田中館

に出張命令が出た。急きょ調査に入り、

発見したのが根尾谷断層だ。家屋全半壊22万余。死者7千余は、人口比10万人あたりでは18・2で東日本大震災の15・1を上回る。この甚大で悲惨な被害現地から帰京した田中館は、理科大学長の菊池大麓に語った。「地震そのものに対しては何とも致しようがないにしても、それから生ずる被害は、これを軽減する予防策を研究するのは国家として大切なことだから、適当な研究機関を創設したいものだ」

こうして震災予防に関する問題講究のため、地震取調局を設置するなどの建議案が国会に提出された。貴族院では可決するも衆議院では却下と、もめにもめた。結局、勅諭により両院協議会にかかり、設置が決議された。

濃尾地震の翌年、世界に先駆けて地震・震災研究機関「震災予防調査会」が誕生。田中館も委員となったこの調査会では、地震学や災害予防研究の方向性が実的に検討され、日本の地震研究が世界最先端をいくことになる土台が、田中館によってリードされた

ことが分かる。

田中館は地震計の改良もし、ロンドンで開かれた日英大博覧会で大賞牌を授けられている。田中館の国民の生活に目を向けた科学者の姿勢は、まさに先見の明そのものである。田中館は「種まきの翁」とも言われた。

（菅原孝平 田中館愛橋会副会長、二戸歴史民俗資料館館長）

【ミニコラム】 心構え易しく説く

地震数え唄 濃尾地震がきっかけとなり、田中館は地震への心構えを『地震数え唄』に作った。

一ツトヤー 人の心を練る地震 科学に磨きをかける地震。二ツトヤー 不意に寄せ来る地震でも 予ての備えにやかなわぬ。(三番～十番略)

老若男女、誰でも口ずさめる数え唄に乗せて、地震への心構えなどを優しく説いた。帝国大学物理学教授といういかめしい肩書の田中館だったが、国民に向けるまなざしは常に温かく優しくかった。